

和人から身を守るために―入れ墨禁止令以後の秘話

わしが入れ墨したのは確か明治四十三年ころだったと思うな。わしの父さんはいつも大きくなって入れ墨はいれるなって言ってたんだけど。そのころわしは雇いに行ってたときで、そこへ「母さん用あるから来いと」って迎えが来たので急いで帰ったのさ。そしたら下屋(げや)下ろして薪なんか入れる所に、ちゃんと火焚いて鍋かけてなんか用意してるんで、何かあったのかなと思ったのさ。そしたら戸口に入るといきなり母さんたちが後ろから捕まえて、両方の腕や頭をがっしりと押さえられて、びくっともできないようにされてね。なんぼ嫌だって言たって、四人も五人もで押さえるもんだから、身動きもできないでね。泣いたってもう声も出なかったよ。

その入れ墨はな、女がやるんだ。わしのは、育ての母親がやった。ガンビ(白樺)の皮の裏も表も取って、真ん中の薄い一番いいところを取って、すっかり磨いた鉄鍋に水を入れてかけて、その下で燃やして、鍋の裏についた煤(すす)をはぎ取って、唇に縦に細かく切り目を入れて、横擦りに擦り込む。マキリ(小刀)でなくてその頃は剃刀あったから切るのは早かったけど、そのあとはれてな、酷く痛んで情けないやら腹立つやらで泣いていたのを忘れないね。

泣きながらわしが寝てから、父さんが帰ってきて「おお、ハル帰ってきていたのか」と言ってるの聞こえるとよけい悲しくてね。父さんは自分の本当の子よりわしを可愛がってくれたもんだから、入れ墨したのわかったらどうするかと思ったら、よく眠れなかったな。

朝、「起きれ、ママだ」って言われたけど、父さんの顔みるの辛くて起きれないのよ。でも「人の家に使われていて、そんなことで勤まるか」って怒られたもんだから、起きてきたけど、わしの顔みるといきなり物言わないで、もうイシャリ(燃えさしの薪)持って母さんをワッタワッタ叩くのさ。そこらじゅう火の粉は飛ぶ、壁も葎(よし)、敷物も葎だもの、火事にでもなったら大変だと思ってね、隣に役人っていうアチャポ(男の人・おじさん)がいたので、裸足になって走って「アチャポアチャポ、父さんハポ(母さん)ば叩いて火飛んでおっかない」って助け求めて、止めてもらったんだけど。

だけど父さんは「俺の言うこときかないで、こんなことした者はおいとくわけに行かない。札幌に送ってやる」ってな。その頃札幌には牢屋ができていたんだね。それ聞いてハポはなにも食べていないのにどンドン浜に向かって走って行くのさ。隣のアチャポが一生懸命母さんを追いかけてながら皆に教えるもんだから、みんなで追いかけてやっと連れて来たんだ。それから、みんなで父親に説得して「お前の嬬(かか)だけ行くんだったらいいけど、子どもの女子(おなご)たちどうする。そうなればこのメノコみんな引っ張られるだ。母さんの気持ちも分かってやれ」って話して、やっと治めたんだって。ちょうどその年の春に東栄に警察の駐在所ができて、その話はすぐ警察の耳に入ったんだってさ。

わし、それでも情けなくて雇い先に二日三日行かないでいたら、親方が迎えに来てね、親方も、「大きくなって口染めるなよ、そんなことしてみろよ、お前の首なんぼあってもたまらないから」って言われていたから、出たら怒られるなと思って辛かったよ。そしたら親方が馬に乗って迎えに来て「なして来なかったんだ」って怒るので、出ていったら顔見るなり今にも叩くような顔するんだもの、おっかなくてただ泣いていたよ。それから馬に乗せられて行ったけど、家までいくあいだ文句言われたね

。

だから、まあまあ今考えたら昔は酷いことやったように思うけど、やっぱり親の心を思うとよく分かるよ。ウタリのしきたりはウエンカムイ（悪神）の厄避けっていうことで、ちゃんとカムイにオンカミ（礼拝）してやったんだけど、わしらの時はそうでなかった。

そして、わしが親無いこと判ってるのか、小さい時からあちこちから貰いに来たらしいの。東栄に、函館から人夫いっぱい連れてアグリ（網元）やってる親方がいて、そこへ伯母さんが御飯炊きにいつてて、わしが何かの使いに行ったことあるの。そしたら「親いるのか」って聞いたらしいんだ。伯母さんは「親なくて貰われて育ててるんだ」って言ったら、「僕に出来ないかなあ」って言っていたんだと。それ、こんどわしば貰うにその旦那、野深まで二、三回も通ったんだと。でも絶対くれないって、両親が断ったんだって。

それから、西舎の大きな農家の親方が、なんか用事あって馬に乗って野深へ来て、わしらの遊んでいるの見て、父さんにわしをくれって言ったんだと。だめだって言ったっけ、したら僕この馬置いてあの子おぶって帰るからくれって言うんだと。それでもやるって言わないで、「馬おいたってな、俺がもし具合悪くて水欲しくても、その馬『水持って来い』ったら水持ってくるか」って喧嘩して帰ったそうさ。

また静内のウセナイの奥の金持ちの家で、男の子ばかりいて女の子のいない家でも、わしば貰いに来たんだと。こうしてあちこちから貰いに来たものだから、ハポは「ちゃっこいときでさえシャモたち貰に来るもの、大きくなったらさらわれていってしまって、俺苦労して育てたあたいない。したから、なんぼ父さんに怒られても口染めておくっちゃ」って言ってたんだと。そのつもりでハポやったんだな。

それとね、日高がまだよく開けないときに、あっちの方から殿様が船で来て、あっちこちに船付けて、山まわって北海道視察して歩いたんだと。そしてそのとき、日高で綺麗な娘二、三人盗まれたんだと。静内から二人と様似から一人だと。

様似からいったのは親一人子一人でね、そこへその子貰いにきた人は写真屋だと。「写真写したら晩に連れて来るから貸せ」って。でもその母親、なんぼしても貸すって言わなかったら、あるときに大きな箱背負ってきて母親の前において「ばあちゃん、娘貸せっても貸さないから、俺前金持ってきたから、これ置くから娘貸せ」って出した物見たら、嫁入り道具やら着物やらいっぱい揃い持って来て広げたんだと。生まれてから見たこともない玉物ばかり出されるもんだから、母親もなんもびっくりしてしまって貸したんだと。「晩には帰すから」って言ったけど、それっきり帰って来ない。それで母親は娘思っ泣いて、飯も食わないで、皆でなんぼ励ましてもだめで、すっかり弱って死んでしまったんだと。

昔そういうことあったために、そんな娘のこと心配してたんだな、母親は特にな。わしらより年上でも入れ墨してない人はいっぱいいるよ。その前はな、額にちよべつと五分位の長さで三分位の幅の入れ墨いれてあったの、女は。ただこうやっていたら、だんだんシャモ、北海道さいっぱい来るようになるから危ないっていうので、入れ墨するべつということでしたんだと。わしらの知っているシャモはみんないいシサム（隣人）だったけど、昔だまされたことは絶対忘れることができなかつたんだべな。昔、カムイと暮らしていたころのアイヌたちのシヌイエ（入れ墨）は、またそれでよかったんだらうがな。

[文責 郷内]

【話者】

浦川 タレ 浦河町堺町東 明治三十二年生まれ(平成三年十月没)